

1. 「水とともに」の連載をして

野口幸重 (信濃毎日新聞社・報道部)

信濃毎日新聞は1989年1月1日から、長期大型キャンペーン「水とともに」を繰り広げてきました。社会面の連載企画(1990年2月までに11部93回)をメインに、毎週日曜日付け生活圏版で、県下各地の身近な川を見開きでワイドに紹介する特集「ふるさとの川」、毎月1回、カラー写真で県外の水辺再生の取り組みをルポする「水の声」を同時進行。「まとめて出版を」といった投書が来るなど県民の反響は大きく、改めて県民の水や河川をめぐる問題への関心の強さを感じています。

連載を始めるに当たり、私たちは①川はコンクリートで固められて汚水の排水路のように、湖は“たらい”のように改修され、今日、水辺環境の再生を望む「親水」がひとつの流行語になっている②野尻湖の淡水赤潮発生(88年夏)や、水源汚染の住民不安を招いているゴルフ場開発問題などから、信州の上流域が新たな危機を迎えているように見える—といった現状について論議した結果、連載企画の基本テーマを次の2点としました。

A. 水辺の潤いある自然環境を取り戻したい

B. 上流県・信州の川や湖を汚染から守りたい

本社の取材チームだけでなく支社局の記者も参加、学習会を開いたりして、それぞれ身近な水問題に目を向け、報道しています。

社会面の これまで11部のタイトル・連載回数、基本テーマ別の分類、掲載時期は次の通りです。

①岸辺のメッセージ・8回(A)=89年1月

②上流域のシグナル・10回(B)=89,2

③生き物のサイン・7回(A)=89,3

④木曽谷に流れを・10回(A)=89,4

⑤飲み水ピンチ・8回(B)=89,5

⑥廃水の迷い道・9回(B)=89,6

⑦水辺の再生・8回(A)=89,8

⑧水源とゴルフ場・10回(B)=89,10

⑨押し寄せる廃棄物・9回(B)=89,12

⑩スイス西独では・7回(A)=90,1

⑪川はだれのもの・7回(A)=90,1

これまでに取り上げたテーマから、主な内容を拾うとー

①岸辺のメッセージ

- ・農具川（大町市）の改修
- ・松川（白馬村）の住民運動の芽生え
- ・工場の発電のために水を奪われた高瀬川、青木湖

②上流域のシグナル

- ・淡水赤潮が発生した木崎湖
- ・北ア山小屋のし尿処理、だれが費用負担を
- ・ゴルフ場開発に不安

③生き物のサイン

- ・人工ホタル水路と飼育箱の中のホタル
- ・サケ復活キャンペーンの壁
- ・流れの多様さに生きるザザ虫（天竜川）

④木曾谷に流れを

- ・清流復活運動
- ・水と緑
- ・愛知の水ガメ

⑤飲み水ピンチ

- ・硝酸塩汚染、トリハロメタンー塩素神話のほころび
- ・地下水捨ててダムに過大投資
- ・浄水器ー現代の悲しい落とし子

⑥廃水の迷い道

- ・下水道に流す水がない
- ・終末処理場の汚泥処理、合併処理浄化槽
- ・農村の水循環「肥だめ」の思想

⑦水辺の再生

- ・桜並木に抜き取り命令（樽川）
- ・木崎湖のヨシ植栽、裾花川の環境整備
- ・川の釣り堀化に待った（雑魚川）

⑧水源とゴルフ場

- ・テトラと農業（大町市居谷里水源と開発問題）
- ・講演会合戦、過疎村の悲哀（同）
- ・災害誘発。カネにならない山林と農地。アセスメント

⑨押し寄せる廃棄物

- ・反対運動噴出、首都圏からの大量流入の背景
- ・「安定型」処分場に不安
- ・水を守る施策と秩序づくりを

⑩スイス西独では

- ・スイスの近自然工法
- ・ボーデン湖
- ・山岳の下水管

⑪川はだれのもの

- ・水利権
- ・河川法
- ・電力と環境

シリーズ「水とともに」には読者の皆様から手紙・ハガキやら電話で様々な反響が寄せられています。

例えばー

- (1) 用水で泳ぎ、遊んだことも時代が懐かしいという30ページに及ぶ回想文
- (2) 発電のために水が収奪された高瀬を私も悲しく思うという切々とした手紙
- (3) 「海へ直行する水路と化したような川に疑問が沸いてきました」（小学校教諭）
- (4) 砂利採取により数少ない昔の川の面影が消えていくのは寂しい（会社員）
- (5) 水問題で学習会を開いたり、住民運動を始めることになったという知らせ（県下各地から多数）etc

今後、このキャンペーンは上流域の汚染対策や潤いある水辺環境づくりのための提言編を考えており、今年前半まで続ける方針で準備をしています。

取材してきた側からの感想を、最後にまとめます。

〔川の排水路化〕私たちの身近な川や用水路は、次々にコンクリートの直線水路に改修され、汚水と余った雨水を捨てるだけの排水路となった。水遊びや魚捕りをしたり、食器や野菜を洗い、歯を磨き顔を洗った川や水路は、過去のものになりつつある。その変化は急に進んだ。

〔失われた水循環〕水道の普及により、何より大切な飲み水が、蛇口ひとひねりで与えられるようになった。その結果「川も湖も汚しても大丈夫。飲み水は幾らでも安心して得られる」—そんな錯覚が蔓延している。汚した水が実はまた、どこかで人間の口に帰って来るというサイクルが忘れられている。

水道普及の一方で農村は衰退した。かつては水を大切に使い、雑廃水もし尿も畑の肥料に還元し、汚水を川へ流さずに土に返した。廃水を出さなかった農村の水循環は失われ、水道普及とともに汚水は「水に流せ」となった。水道が普及する一方で、水を捨てることはおろそかにされ、飽食時代の雑廃水の垂れ流しが続いている。下水道処理水もし尿処理水も最後は結局、川か湖に捨てられる。

水質汚濁の6割を占めるという家庭廃水の流入で、川の「三尺流れれば水清い」の自浄作用では間に合わなくなった。と同時にいたるところでコンクリート三面張りの「排水路化」が進み、自浄能力も低落した。

〔洪水ピーク〕川の排水路化はもちろん治水が目的だ。直線のコンクリート水路は目の前から洪水が早く流れ去っていくかもしれないが、一気に強く流れるようになって、下流の洪水ピークの山は高くなり、飯山水害（昭和57・58）のような事態を招く。

かといって川を連続堤防で締め切り、早く海へ捨てようという治水の論理はいまさら急には変わらない。川の本来の氾濫領域に都市がべったり張りついてしまったから、かつての霞堤のように、洪水と共存することは不可能になっている。

また上流域の山林開発で山の保水力を衰えさせておいて、そのツケを川に押し付けている。これも洪水ピークの山高くさせている。

〔水とともに〕汚水と洪水を流すという機能だけで川を作り替えてきた結果、水はますます汚れ、新たな洪水の危険を大きくするという弊害が生まれた。

自然な川の領域をもうすこし認めてやり、水辺の自然環境の再生に向かうことは、きれいな上流域の水を守り、人間生活と地球環境が共存する一歩にもなりはしないか。

私たちのキャンペーンについて積極的に御意見をお寄せくださいますようお願いいたします

第1部 岸辺のメッセージ

草むらに歩かすといふ。踏みつぎ
さないうちに歩くのが大変なほど。
欄の柱に群れている雀、小学生の
女の子がクリスマスツリーみた
いふやつだ。

「並行して川沿いとはよく言った
もんだ。大町市役所に勤める坂
田君もこんなところだ。市東部を
流れる貴川のはとりに生まれ育っ
た。『あんなゲンジボタルの乱舞は
初めて見た』。昨年七月の夜のこと
が忘れられない。昨春にくらばは
かりの百瀬先生（洋さん、当時七十
七歳）に見せたかった。

百瀬さんは元中学校の校長。五十
七年に定年した。大町市の水を美し
くする会のリーダーだった。坂田
さんは当時からのメンバーの一
人。彼の私語を見て、六年にわたる
自分たちの運動が間違っていないか
たを改めて考えた。だから、百瀬
さんの顔がすぐに浮かんだのだ。

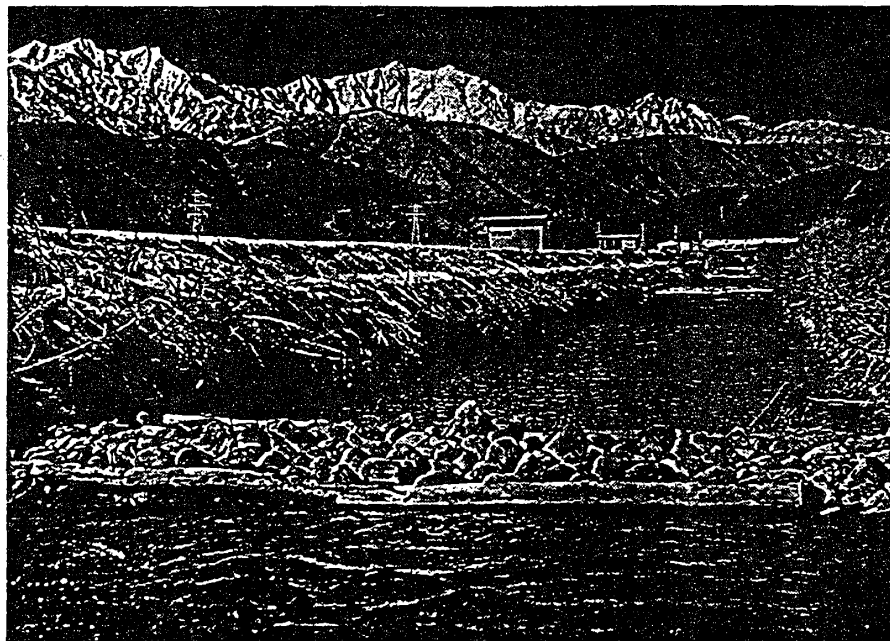
「ものを言えない川や、魚や、雀の
声を聞かさない」。坂田さんはその
夜、夢の声を聞いた思いがした。

土手を歩くと、水の冷たさが心地
よさそうに遊ぶウグイスの群れが見え
る。貴川は延長約十四。そのうち
中流部の一。足らず、幅四一五、
が自然下法による改修区間。昔から
伝わる「木枕匠」という工法をこ
つて。木枕を組んで中に石を詰め
め、土から流れにけがれを免れ出
した形で決めている。これが八十
に開闢。両岸に並ぶ。水が流れる
「淵」に押しよせ、淵（ふ）
ろ（ふ）あてて形づくっている。
もともと、貴川は静かな川だった。

た。それが治水工事の改修の際に直
線化された。「木工枕匠」の採用

水とともに

題字は山野井竹笠氏



魚群れる淵

北アルプスのもと大町市を流れる貴川。上流の改修部分にも木枕
匠を踏めた「木工枕匠」があり、豊かな魚群の保護に努めている

農具川にホタルの声を聞いた

一歩の改修。それは、五年にも及
んだ。貴川が魚群保護を主眼とし
た河川改修工法のモデルとして、全
国に知れ渡ったゆえだ。貴川川の
改修工法は、新たな自然、人と木と
のかかり方を教えてくれる。
だが、貴川川は例外中の例外。多
くの河川は改修によって「コンクリ
ー」で固められ「排水路」と呼んだ方
がよくなる。水が流れ、よみ、曲
がりくねって、飛び散る。草木が
覆え、川下で魚が群れる川の姿は異
内から一つ、また一つ消えていく。

生活映す水面見据えて

や工場からの排水化はもう、
水が地味全は禁じられている。
黒下のゴルフ場予定地では昨年、
「水を守る」運動が十数カ所で行
に引き出さ。殺虫剤などの農薬、
による水質汚染が懸念されるため、
高野野池地区に大量にまかれる農
薬や肥料、最上流の山小屋のし尿
理の問題も、二三年クロウズア
プしている。

「水の惑星」といわれる地球上に
は十四億立方メートルの水がある。し
かし大半が塩水が海の水で、人々
の身近にある淡水は、川や湖に地
水などを含めて、地球上の水の
たった〇・八％にすぎない。その〇
・八％が、蒸発され、あるいは、
自然をめぐっていくことをなく
源にどんなに枯れる方向にな
一本の枝は、こう言っている。
「言っているのはなにかが、
「近代科学技術の進展です。自
然の事は取捨してもいいけれど、
人間はいくらでも大丈夫。科
学技術は（この）動機に立って、
川や湖に上る。だが、貴川川
サケが上るまでの生命の循環を
断ち切ってきた。自然の生態系
まで含めた体系的な水辺への視点は
無かった。水は環境と生命の
なかに、新緑の大能率教員（
川工）は驚かす。

貴川川を最初の足がかりに、大町
・北安曇地方を歩きながら川や湖
沼、水と人々のかかわりを考えよ
う。

（山野井氏は元貴川協議会会
長）
「水ととも」は、このシリ
ーズのほか、毎日「生活版」
版で貴川川の現状をワイ
ドに水、月一回、全国の「
水運動」の状況をカラーグラ
フで紹介する。

水

80

いったんコンクリートで固められた川を、自然に近い姿に
かえらせろ。湖の浅瀬を法律で保護する。アルプスのふもとで
開いたある岸邊を取り戻そうとする試みが始まっている。こうし
た動きは、技術大國ニッポンが忘れかけた水のかかわり方に多
くの示唆を与えている。スイス、西ドイツから、水を守り、水と
共生する取り組みを報告する。

(渡辺秀樹記者)

さらさらと心地よい水音が、村
の静けさを引き立てる。スイス・
チューリヒ市郊外のワイン産地、
マルターレン村。白壁にえんじ色
の板で縁取りをした幾何学模様、
レンガ屋根。窓には赤いセラニウ
ムの花々。

古くからの家並みを残す人口千
五百人足らずの村に、騒動が持ち
上がったのは十年近く前のこと
だ。

「いやあ、あの時は驚きまし
た。この川を数倍に広げたうえ、
コンクリートで固めるって言うじ
やないですか。とてもこの村の風
景に受け入れられるものじゃあり
ませんよ。だから、私たちは反対
運動をしたんだ」。自宅の庭先を
流れる幅二メートルの小川を指さ
しながら、反対運動のリーダー格
だった農業ウーリスラー・リッブス
さん（65）が振り返った。

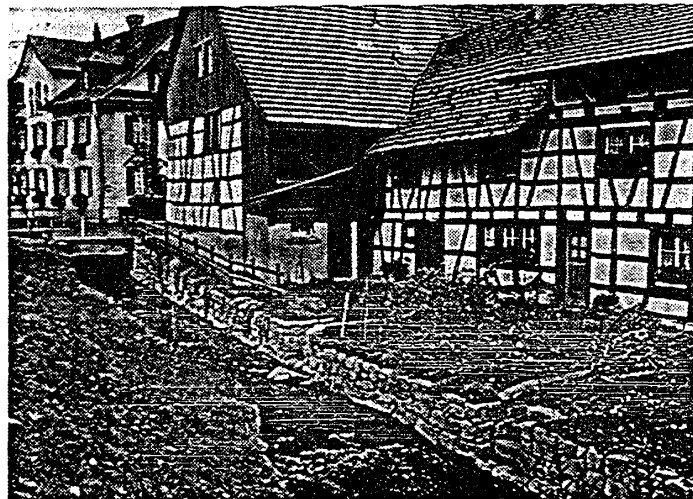
「いやあ、あの時は驚きまし
た。この川を数倍に広げたうえ、
コンクリートで固めるって言うじ
やないですか。とてもこの村の風
景に受け入れられるものじゃあり
ませんよ。だから、私たちは反対
運動をしたんだ」。自宅の庭先を
流れる幅二メートルの小川を指さ
しながら、反対運動のリーダー格
だった農業ウーリスラー・リッブス
さん（65）が振り返った。

河川改修にも影響調査

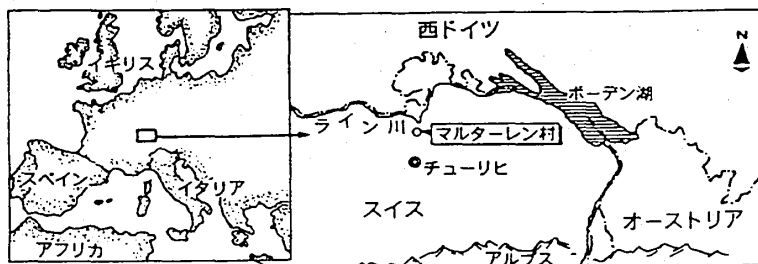
して、家の床下まで浸水すること
があった。州が流域につくった自
動車の雨水が加わり、浸水は頻
繁に起こるようになっていた。

州建設局はこれまで手掛けてき
た手法と同様に、まず川幅を拡張
改修を担当する州建設局河川維
たプランなのに……

持・建設監督課のクリスチャン・
ゲルティン氏は当時、建設局に
入局して間もなかったが、村会否
決には少なからずショックを受け
たという。「村の安全を最優先し
て、事前環境に及ぼす影響
を予測調査する（環境調和テス
ト）（UVP）が盛り込まれた。



守られた景観
日本でいえば「環境アセス
メント」の適用で改修され
たスイス・チューリヒ州マルターレン村の小川



長野県の環境影響評価（アセス
メント）制度が発足するちょうど二
年前のことだ。

この着状態に陥っていたマルタ
ーレン村の河川改修は、このUVP
の試行例として取り上げられ
ることになった。ポイントには「
観」「生態」だった。

河川技術者だけでなく、景観
者、生態学者らも加わった研究
グループが組織され、代替案が検討
された。その結果、すべて拡張
なくとも、上流に増水時の水を
める調整池を造ることで、流量
制御できることが分かった。種
田が必要な部分は自然石を積んで
田の景観との調和を図るなどの
終案が示され、村は村民集会所
いてこれを承認した。

川幅が極端に狭かったリッブ
さんの家の前は、増水時の水を
下に通す方法で「景観を壊す暴
的な拡張」を免れた。「満足し
ますよ。これが広げられてこ
なさい。水の少ない時はそれ
そ、川底をちよろちよろはう
で、不自然じゃないですか」